

# グリーンワークショップによるコミュニティ形成過程と要因に関する研究 Study on Prosess of Formation and Factors about Community by Green Workshop

甲野 毅\*

Tuyoshi Kouno\*

特定非営利法人 集住グリーンネットワーク\*

要旨:本研究は都市における緑地保全活動を通じたコミュニティの形成過程と要因を明らかにすることを目的とする。調査対象に緑地保全活動を働きかけ、コミュニティの形成に着目し、対象者の応答を調査した結果、その形成段階は2段階に分かれており、それぞれ形成要因が異なることが示された。交流意欲により集った集団は、緑を通じた活動に参加する中で、緑に関心を示していく。そして初期の段階である緑を通じた交流を目指した親交的コミュニティが成立する。さらにそのコミュニティが活動に主体的にかかわり、さまざまな問題に対処していく中で、問題意識が共有化され、信頼関係が芽生え、第2段階の緑の領域における自治的コミュニティが成立することが示された。

キーワード:グリーンワークショップ, コミュニティ, 形成過程, 形成要因

## 1. はじめに

東日本大震災以降、絆やコミュニティの重要性が再認識されているが、都市における緑地保全活動を通し、市民交流が促進され、コミュニティが形成されることが報告されている。岩村ら(2009)は神戸市民の公園管理活動の実態を調査し、花壇の存在とそこでの活動が参加者のコミュニティ形成を促進していることを明らかにし、赤澤ら(2008)は団地の住棟間にある公的空間の緑地に参加することが、高齢者の知り合いの発生に影響を与え、コミュニティの形成に寄与していることを示している。このように緑地の保全活動を通し、コミュニティが形成されていることが示されたが、活動のどのような要因がその形成を促進しているのか、また成立過程は示されているとはいえない。さらに先行研究では、コミュニティの明確な基準を示していない。倉沢(1998)はコミュニティを、市民としての自主性と責任を自覚した個人、家庭を構成主体にし、地域性と各種の共通目標を持った開放的で構成員相互に信頼性のある集団とし、その成立基準として地域性、共同性、共通の絆をあげている。これらの基準に当てはめると、人が集い交流するだけではコミュニティが成立したとはいえないと思われる。

## 2. 研究の目的と方法

### (1) 目的と方法

そこでこれらの未解明点を明らかにするために、本研究の目的を都市の緑地保全活動を通じたコミュニティの形成過程と要因を明らかにすることとする。研究方法は、調査対象に緑地保全活動を働きかける。そして働きかけに対する応答を参与観察し、また対象者に聞き取り調査を行い、緑地保全活動を通じたコミュニティの形成過程と要因を明らかにしていく。

### (2) 調査対象

調査対象の条件は第1に調査対象地の徒歩30分以内、300m以内に緑地があること、第2に対象とする人々が何らかの集団に所属していること、第3に新規性とする。第1の条件は、中島ら(2007)によると緑地保全活動の促進要因であり、参加への阻害要因を除去するために本条件を設定する。第2の条件は、不特定の参加者を対象とすれば、観察をすることが困難となるので、何らかの集団に所属することにより観察することが可能となるので、また第3の条件は、過程を観察するためには初期の段階より調査する必要があることより、この条件を設定した。以上の3つの条件を満たす、都市に新規に建設された共有緑地を持つ、集合住宅の居住者を対象として調査を実施する。

### (3) グリーンワークショップの実施

①グリーンワークショップ

広瀬(2008)はアクションリサーチを実施するための必要な要件の1つとして、目的とする行動の要因を把握し、効果的なプログラムを選択することの重要性を示唆している。目的とする行動は、共有緑地の保全活動であり、はじめに緑地保全活動への参加要因を明らかにする。倉本ら(2002)は、自然環境に関する知識習得意欲や緑地の保全意欲などの動機、活動参加者との交流意欲が、活動を促進することを示している。またコミュニティを検証した先行研究は、子供やサークル活動を通じての関係、住宅団地の役職などを担うこと(文屋 1990)が、また利害の共有(玉野 1990)や関心の共有(江上 1990)が、集合住宅における交流やコミュニティの促進要因となることを示している。これらの参加要因や促進要因をワークショップの開催により対象に働きかけていく実践をグリーンワークショップと位置づけ、本研究ではコミュニティに焦点をあて、対象に働きかけた結果を分析する。具体的には1年目は参加者どうしが認知することができる交流会、1から3年目は共有緑地における共同性を伴う活動、4年目以降は問題となることについて参加者が話し合うことができる場を設定した(表1)。

②運営形態と調査対象の概要

グリーンワークショップの主催者は、集合住宅を管理する企業であり、調査者はそこから依頼を受け、グリーンワークショップを実践する。本研究では、調査者が実践している集合住宅の内、居住者が主体的に共有緑地保全活動を行っている集合住宅Aを取り上げる。

集合住宅Aは東京都区内に位置し、周辺には集合住宅が立ち並ぶが、河岸段丘沿いの緑地等もあり、比較的緑が色濃く残る環境である。建物は10階以上であり、居住者は約50世帯、2006年に分譲され、入居を開始した。居住者は30~40歳の世代が70%以上を占める。集合住宅Aの共有緑地は約600㎡程度であり、主にビオトープ、住棟前の散策路、建物周辺緑地の3つのゾーンから形成される。住棟前の散策路には周辺の緑地と同じ種類の樹

種が植栽され、また居住者が利用することができるように、ハーブや果樹なども植栽されている。

3. 結果

(1)活動結果の概要

調査対象地Aにおけるグリーンワークショップは、図1に示すように2006年5月に第1回を開始以来、30回以上開催し、現在も継続中である。1年目に多くの参加者がいたが、2年目の中盤以降、参加者が減少し、3年目以降は安定した状態で推移している。

グリーンワークショップの運営形態は、調査者と主催者主体の活動から、参加者主体の活動へと移行している。発展段階を整理すると、1年目から3年目の調査者が主催した受動的グリーンワークショップ参加段階、4年目の参加者から構成される共有緑地の保全活動に積極的にかかわる「みどりクラブ」と共同運営を実施した共有緑地保全活動段階、5年目以降の「みどりクラブ」が主体的に活動をした主体的共有緑地保全活動段階の3段階に分類することができる(表1)。

表1 グリーンワークショップの経過と内容

時期	主な出来事	緑の内容	コミュニティの内容
2006年度	受動的グリーンワークショップ参加段階	共有緑地の植栽と散策・クラフト作り	交流会開催・共同作業機会の提供
2007年度		共有緑地の管理と散策・クラフト作り	共同作業機会の提供・交流会開催
2008年度		共有緑地のハーブ植栽・管理・利用	共同作業機会の提供・交流会開催
2009年度	共有緑地保全活動段階	共有緑地の管理・改革・利用	話し合いの場の設定・交流会開催
2010年度	主体的共有緑地保全活動段階	-	-

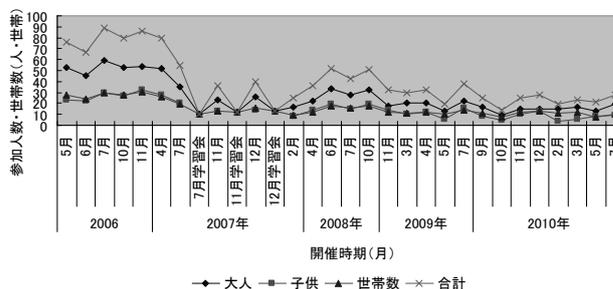


図1 グリーンワークショップの参加人数推移

(2)コミュニティ形成過程の分析

本節ではコミュニティが形成されたと判断する4年目の共有緑地保全活動の段階まで、その形成過程を時間の経過に従い分析する。調査対象は、受動的参加段階では参加者、共有緑地保全活動段階

階では主に「みどりクラブ」が中心となって活動しているため、そのメンバーとし、それぞれの反応について表2に記す。なお本研究ではグリーンワークショップの開催により、人の集まりが形成された集団と、それらに共通の絆、共同性などが加わった状態であるコミュニティとは区別をする。

### 1) 1年目の動向

#### ①交流会を契機とした集団の形成

1年目のグリーンワークショップでは交流会を毎回開催した。開始当時は参加者どうしの交流が活発であったとはいえなかったが、事例1-1が示すように、グリーンワークショップの開催とは関係なく、ホームパーティーのようなものを開催し、家族どうしの交流が活発化していった。「ワークショップがあったからこそ住民間の交流があった。」という声があるように、グリーンワークショップは、同じような世代の参加者の存在を、より早く知る契機となり、同世代からなる集団の形成を促進していたと思われる。

#### ②子育て世代を中心とした集団の形成

グリーンワークショップの共有緑地を通じた作業は、事例1-2が示すように、母親達の交流を促進していたようである。また参加者は、事例1-3のように同じような境遇の参加者が増えたことに喜び、今後の交流に期待をしていた。子供を持った母親達にとって、グリーンワークショップはお互いを知り合う契機、情報交換の場として重要な役割を担っていると思われる。子供を持つ親どうしが、共通の楽しみや問題などを共有し、子育てを通じた同世代からなる集団を形成していったと想定できる。

### 2) 2年目の動向

#### ①共同作業の実施

グリーンワークショップでは開始当初から参加者どうしが共同で作業をする機会を与えた。1年目は事例1-4が示すように、参加者は共有緑地の共同作業において単独または家族単位で行動をし、協力体制はあまりみることができなかった。しかし多くの共同作業の機会を経て、事例2-1が示すように、簡単な作業については家族の範囲を

超え、お互いに協力しあう様子が見られ始めた。

#### ②料理作りを契機とした機能的集団の形成

1年目には調査者が交流会の料理を提供していたが、2年目は参加者に料理作りを行うように依頼した。そこには常時10名程度の女性の参加者が集まり、女性達は事例2-2が示すように、言われたことをこなすだけでなく、料理の材料、器具を提供するなどの積極的な姿勢をみせていた。そしてこの集団は、自分達だけが楽しむのではなく、子供や男性も作業に引き込み、一緒に作業を行いながら目的を遂行していった。2年目の交流会では料理作りへの積極性が表れ、周辺の人々を引き込み、自発的に資材提供するなど、料理作業に限ってだが、その目的を遂行する、機能的な集団ができあがったと想定できる。

#### ③共有緑地への関心の共有化

参加者からの要望により自然環境について学ぶ学習会が開催された。そこでは事例2-3が示すように想像していなかった工夫や意図が共有緑地に施されていることを伝えられ、また事例2-4が示すように周辺緑地を散策しながら、共有緑地を見直す場となり、緑を通じた会話が参加者の間で交わされていった。3回開催された学習会またはグリーンワークショップにおける共有緑地の維持管理活動を通じ、参加者の中に共有緑地への関心が共有化されていったと思われる。

### 3) 3年目の動向

#### ①共有緑地の活動における機能的集団の形成

開始当初には共同作業をすることをあまりしなかった参加者は、2年目には協力して行動するようになっていた。そして事例3-1や3-2が示すように作業に従事する参加者は、調査者からの誘いを契機とし、参加者どうしが協力し、コンポストを作るまたはドライハーブを作るために自分達で判断しながら自主的に作業を行っていった。共有緑地の活動における目的を達成するための機能的な集団を形成していったと考えられる。

#### ②同世代交流の沈静化と会話内容の変化

参加者が減少している状態を改善するために、その増加を目的とした交流会を開催した。だが主

表2 グリーンワークショップにおける参加者と「みどりクラブ」のメンバーの反応

1年目の動向
事例 1-1『ワークショップ終了後、Aの自宅で数度目のホームパーティーが開催される。6家族程度が集まり、一時は15名程度の住民達で部屋まわはつくなる。「こんど(赤ちゃん)いつ生まれるの?」「大の〇〇ちゃんが好き」などの日常的な話が繰り返り広げられていた。14時こぼれた後は20時程度まで続いていた。』
事例 1-2『作業開始後、お母さん達のグループが集まる。作業をするための手廻りについて話し合っている。『〇〇が植えてどうなの?うちが〇〇どうなの?うちが〇〇よ』』というような子育てに関する話が繰り返り広げられている。』
事例 1-3『「今日お子さんがいらっしやる人が増えたなって思っ、とても嬉しいです。これからお友達が増えていけたらいいなと思っています。』
事例 1-4『ハーブの勉強会とハーブの樹木札作り、そしてハーブの刈り込み、植栽を行った。作業時間と子供などの家族が基本である。刈り込み、植栽作業は時間がないようで、参加者は恐る恐る作業をしている様子である。わからないと調査者を捕まえて、「どこまで切るの?」「どこに植えるの?」などの質問が返りかかっている。』
2年目の動向
事例 2-1『樹木札を作るための間伐材のこきりで切る際、家族内、または調査者と共同して作業する参加者が多かった。切る際こ丸太をおさえる、キリで穴をあける際切った材料を固定するなどの、協力をしながら作業する居住者が存在している。』
事例 2-2『予めビザ作りとオープン貸し出しに協力してくれる人を依頼しておく。ビザ作りは調査者の下で役割分担を適確に行い、子供も混ざってビザ生地づくりに従事している。トッピングにチーズ、そして共有緑地で収穫したパプリカとミントを用意したが、参加者の1人が「これではさびしいです。家の庭にミニトマトあるから。」と多量のトマトを提供してくれる。オープン提供者が途中で、何度も家と玄関前広場のビザを焼くため往復し、10枚以上のビザが焼き上がる。』
事例 2-3『共有緑地を参加者がグループを作って散策しながら、植栽されている樹木の形態の意味、ハーブや果樹が植栽されている意義を調査者が伝える。「ただ植えられているだけだったの」、「地域の自然と関係があったのは」と参加者が初めて共有緑地と接するような雰囲気、お互いへ感想を述べている。調査終了後も共有緑地の樹木やピオトープについて感想を言い合っている。』
事例 2-4『参加者が10名程度のグループになり、周辺緑地を散策する。そこでは共有緑地と緑地の相違点や同類点について調査者から伝えられる。参加者どうしが興味を持って意見を繰り出す意見を言いながら歩いている。』
3年目の動向
事例 3-1『発注材として使用できる量に限られているため、多量に集められた材料(剪定枝)が余っている状況になってしまう。調査者が「外に捨てるのもなんだから、中にコンポストでも作りませんか?」「どこに作りましょうか?」という質問に男性を中心に場内探検を行い、コンポストを作り始める。』
事例 3-2『「余ったハーブをどうしましょうか?」の問いに、「毎回捨てているのもエコじゃないよね」、「せつかく育てたしね」などの参加者から出された意見より「まとめてドライハーブを作りましょう。』10名程度が参加し、遊覧プレーにより束ねたハーブのかたまりを玄関前広場の壁に乾燥機を使用してかきつけていく。15分程度でまとめられたハーブが約30束、一列で壁にかかされた。』
事例 3-3『わしらは田舎で育った。自然が当たり前の環境であった。子供こそそれを味わわせたい。今のピオトープは博物館で手を出せない。生きもの欲しい。できれば半分は入れる自然、半分は生きもの環境。』
事例 3-4『全部子供のために利用することができぬ。トンボのためでも川床でも、プールでもよいから使いたい。限られた狭い中で特定生きもの聖域がある考えは面白いのでよ。』
事例 3-5『落成ミーティングで居住者が10名程度参加した。はじめに今後ワークショップでどのようなことを行っていくのかを話し合うことにした。大きなテーブルの周りに参加者が腰をかき、ポストイットにやりたいことを書き込んでいく。夢のあるもの、実現不可能なもの大歓迎、人の出したものへの批判はご法度で実施した。Aの2枚の紙がポストイットで埋め尽くされた。』
4年目の動向
事例 4-1『ミーティングで活動するグループを3期に分類し、それぞれのリーダーを選ぶことにする。メンバーに挙手をしてもらい、「生垣班やります。」「それで私達高木班。」「じゃあF班。』すぐにリーダーが決定する。』
事例 4-2『1人の参加者の提案で往來散策路づくり、作業の確認をすることにする。「どこで位置で切る?」「高木はどれを選択し、枝を落とそうか?」「この樹木は剪定する必要がありますかかね」と1本、1本の樹木の剪定方針を確認していく。』
事例 4-3『メンバーの1人が声を出して「こっちです」と参加者を引っ張る。道具をまとめ、ボーダーガーデンのほうへ移動する。伐採した枝葉が出始めると、「が」通称用のメソックスを倉庫から持ち出し、玄関前広場へ枝葉を運び始める。ボーダーガーデンと玄関前広場の間を小走りで、駆り回っている。』
事例 4-4『グリーンワークショップが終了すると、みどりクラブのメンバーが帰宅をせずに、10名程度の参加者が玄関前広場に残っている。標こ予定はしてなかったが、次のプログラムを決めようという話になる。メンバーから次回実施したい内容について多くの提案が出される。調査者は提案を取り込みつつ、話し合いにより、次回よりメソックスの伐採、寒肥を提案する。』
事例 4-5『終了後に残ったメンバーが、往來散策路の様子を観察していく。「ここに変化を付けてもいいのでは?」「チェリーセージやレモンセージなどの同種ハーブしか収穫できない」、「どうするか?どこまでかえようか?」「何植えるの?」「違う種類のハーブがよいのでは?」「他に植える。皆で使えそうな?」「トマトとか?」「全部畑にする?」「皆で使ったものを木理したいよね」、「パプリカもトマトもここにビザ?」「トマトケチャップとか?」「さんは、ご意見は?」「よいと思いますが、あまり極端すぎるのも」、「暴走する私達を止めてくれてありがとう。」「綺麗なものを植栽するのがよさそうだね。ナスタチウムとかね。』

主催者が想定したほど参加者は集まらなかった。またホームパーティーは以前のように頻繁に開かれることはなくなっており、入居当初に活発であった、交流を目的とした同世代交流は沈静化をしているようであった。参加者の興味は単なる交流だけではなくと思われ、交流会などで交わされる話の内容は、事例 1-1~3 が示すような世間話から、事例 3-3 や 3-4 が示すような、ピオトープのあり方に関する意見など、共有緑地を題材とした内容に変化していった。

### ③「みどりクラブ」の発足

2008 年度終了後に主催者がグリーンワークショップを自主開催へと移行する打診をし、機能的な集団を基にする参加者の有志の集団が、主催者と調査者と共同運営するという方針を決定した。そして今後のグリーンワークショップの運営方針や実施内容に関し協議する場では、事例 3-5 が示すように、多くの意見が出され、共有緑地に積極的にかかわる「みどりクラブ」が結成されることになった。

### 4) 4年目の動向

4年目のグリーンワークショップは主催者と調査者との共同運営になったことにより、さまざまな話し合いの場が設定された。

#### ①自主的な運営

グリーンワークショップでは多くの異なる作業があり、これまで調査者が担っていた作業を、共同運営になったことより「みどりクラブ」のメンバーが分担することになった。そこでは作業を指示するリーダーが必要であったので、事例 4-1 が示すようにグリーンワークショップの開始時間前に「みどりクラブ」のメンバーの数名が集合し、調査者と協議し、当日の役割分担を行うようになった。メンバーはリーダーの役割を与えられると、事例 4-2 が示すように他の参加者に伝えるための知識を習得する意欲を持ち始め、また知識を伝えるだけでなく、事例 4-3 が示すようにグリーンワークショップを支えるような仕事を行う者も出現した。また開始前だけでなく、終了後にも「みどりクラブ」のメンバーの数名が集まり、

今回のプログラム内容を協議するようになった。そこでは事例 4-4 が示すように、調査者からの提案を受けるだけでなく、自分達が行いたいアイデアを提案し、積極的にプログラムの内容にかかわっていかうとする姿勢をみる事ができた。

## ②問題の協議

「みどりクラブ」のメンバーは、共有緑地でおきる問題に関心を示し、それらを協議するようになっていた。例えば事例 4-5 が示すように、多種多様なハーブが植栽されていた住棟前散策路には、強いハーブが優先し、収穫できる種類が限定された状態であった。その状況を改善するために、野菜を植栽する提案が一部のメンバーから出される。その提案に対し、すべてを変えてしまうことに対する疑念が示され、今の景観を維持しながら、ハーブ主体の食べることができる植物を植栽するという結論になった。

このように共同運営をした 2009 年度の共有緑地保全活動の段階では、表 3 が示すようにさまざまな問題点が発生した。メンバーはグリーンワークショップ終了後の話し合いの場や、交流会の場を利用し、問題の改善について協議を行い、自主的に解決することに意欲的になっていった。そして 2009 年度終了後にメンバーはグリーンワークショップを自分達ですべて自主的に運営する方針を決定した。

表 3 2009 年度「みどりクラブ」の協議事項

植栽管理方針	管理対象樹木の範囲・繁茂ブツの処理方法 実生木(キリ)の処理方法
ビオトープ	ビオトープ管理方針
共有緑地の生産方針	共有緑地の構造改革の方針・植栽苗リスト ダストルーム屋上の植栽方針

## 4、考察

### (1) コミュニティの分類

倉沢(1998)が示した地域性、共同性、共通の絆の基準に照らすと、「みどりクラブ」が主催者と調査者と共同運営をした共有緑地保全活動段階に、コミュニティが成立していると解釈できる。メンバーは共有緑地を活動領域としていることより地域性があり、その維持管理のために共同していることより共同性があり、そしてより良い共

有緑地のためにメンバーが協議していることより共通の絆があると判断できるからである。さらに倉沢(1998)はコミュニティを近隣レベルの住民相互の交流を目指した親交的コミュニティと、問題群への対応として位置づけられた自治コミュニティに分類している。調査対象地においても、受動的参加段階の後半から緑地保全活動段階の初期の、共有緑地を通し、参加者どうしが交流している親交的コミュニティが形成された状態、緑地保全活動段階の後期から主体的緑地保全活動段階の「みどりクラブ」のメンバーが問題に対応している自治コミュニティの状態に分類することができる。次節ではそれぞれへの形成過程と要因を分析する。

### (2) 親交的コミュニティの形成過程と要因

グリーンワークショップへの参加理由に関する聞き取り調査<sup>注1</sup>では、「他の居住者との交流」をあげる回答者が 13 人中 10 名であり、参加者の交流意欲が強いと思われる。調査者が企画した交流会では参加者が次第に交流をしていく様子を見ることができた。また共同作業の機会を契機とし、料理作りなどの参加者どうしが協力し、目的に向けて行動する機能的な集団が形成されていった。

さらにグリーンワークショップの開催を通し、参加者は共有緑地への関心を高めていき、交流会では、そのあり方について意見を交わすようになり、初期段階の同世代を背景とした交流から、共有緑地を題材とした交流へと変化していった。グリーンワークショップの価値をたずねた聞き取り調査では「緑は居住者の共通の関心と確認するところ」「緑にかかわる作業を通じた交流」などの回答が 13 人中 6 名あり、参加者の共通の関心である共有緑地を通じた交流に価値を見出していると思われる。共通の関心を持つ参加者は、目的のために動く機能的集団を基に「みどりクラブ」を形成し、それは共有緑地の保全活動の主体となっていた。参加者は他の参加者との交流意欲から、同世代集団を形成し、共有緑地を通じた共通の関心の芽生えと機能的集団の形成を経て「みどりクラブ」という親交的コミュニティを形成していっ

た。以上より参加者の交流意欲, 共通の関心, 共同作業が親交的コミュニティの形成要因と考えられる。

### (3) 自治的コミュニティの形成過程と要因

「みどりクラブ」が共有緑地保全活動の運営にかかわる中で, メンバーは主体的にグリーンワークショップの運営や管理活動に携わっていく。その過程で共有緑地におけるさまざまな問題があることを認識し, メンバーはそれらの問題の解決に意欲的になっていた。そして「みどりクラブ」は主催者と調査者との共同運営からすべてを自分達で行う自主活動へと移行していった。グリーンワークショップを自主運営するようになった理由をたずねた聞き取り調査では「ビオトープをはじめとした緑の問題を通し, みんなの意識が共有された。」などの参加者の問題意識が共有されたこと示す回答, または「1人では無理だがみんな協力すればなんとかできる。」などの他の参加者への信頼を示す回答が存在した。メンバーは共有緑地の問題の解決に向けて協議していくなかで, 問題意識の共有化, 相互の信頼関係の構築を経て, 「みどりクラブ」は緑の領域において自治的コミュニティへと変化していった。以上より問題を通じた意識の共有化, メンバー間の信頼関係の構築が自治的コミュニティ形成要因と考えられる。

### 5. おわりに

本研究は調査対象に緑地保全活動を働きかけ, コミュニティに着目し, その形成過程と要因を検証し, 以下のことが示された。

参加者は他の参加者との交流意欲より, 同世代を背景とした集団を結成している。そしてグリーンワークショップを通し, 共有緑地に関心を示し, また共同作業を通じた機能的集団が基になり, 共通の関心を通じた親交的コミュニティを形成していった。そのコミュニティのメンバーは運営に積極的にかかわるようになり, そこでさまざまな問題を自分達で解決する意欲をみせていく。問題を解決する中で, 意識を共有化し, お互いに信頼し, 緑の領域において自治コミュニティを形成していった。本研究では親交的コミュニティを経て,

自治的コミュニティが形成され, その形成段階があることが示された。またその形成要因は親交的コミュニティの場合は交流意欲と, 共有緑地という共通の関心の存在, 共同作業が, 自治的コミュニティの場合はメンバー間の問題意識の共有化と信頼関係の構築であり, コミュニティの成立段階により, その促進要因が異なることが示された。

### 補注及び引用文献

注1 調査は2009年10, 11, 12月にグリーンワークショップ終了後に「みどりクラブ」に所属している8名, 一般の参加者5名に行った。年齢は30から40歳代で, 男性9名, 女性4名である。

赤澤宏樹, 中瀬勲, 2000, 「南芦屋浜団地における緑化活動を通じたコミュニティ形成への支援に関する研究」, 『ランドスケープ研究』, 63(5):705-708.

江上渉, 1990, 「団地の近隣関係とコミュニティ」, 倉沢進編, 『大都市の共同生活』, 東京都立大学出版会, 東京, 100.

文屋俊子, 1990, 「団地のイメージ」, 倉沢進編, 『大都市の共同生活』, 東京都立大学出版会, 東京, 39, 49-50.

広瀬幸雄, 2008, 「環境行動を普及するためのアクションリサーチ」, 高木修監修, 『環境行動の社会心理学』, 北大路書房, 京都, 84.

岩村高治, 横張真, 2001, 「神戸市における地域住民による公園管理の実態とその展望」, 『ランドスケープ研究』, 64(5):671-674.

倉本宣, 永井敬子, 2002, 「桜ヶ丘公園雑木林ボランティアの活動と組織に対する意識」, 『ランドスケープ研究』, 65(5):455-460.

倉沢進, 1998, 「コミュニティ論」, 放送大学教育振興会, 東京, 189.

中島敏博, 田代順孝, 古谷勝則, 2007, 「都市近郊住民の利用および保全参加しやすい緑地と生活圏の距離」, 『日本造園学会全国大会研究発表論文集』, 25:579-584.

玉野和志, 1990, 「団地の都市社会運動」, 倉沢進編, 『大都市の共同生活』, 東京都立大学出版会, 東京, 172-173.